

---

# 疾風伝

呪いのマリア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

疾風伝

### 【Zコード】

N3101E

### 【作者名】

呪いのマコア

### 【あらすじ】

ヤバイ！－私暁抜け出してきちゃった！－運の悪い事に力カシに見つかっちゃった！－まじヤバイ－－どうじよつ－－

暁を抜け出す〜。〜。〜。（前書き）

およみくだわー

暁を抜け出す？？！

里をでて3年・・・・

サスケは大蛇丸と手を組んだらしい・・・・

そして私は・・・・

ばれる

構成員のほとんどがS級犯罪者と呼

暁に所属している・・・・

暁とは謎の小組織・・・・・・・かつて大蛇丸が入っていたが  
今は抜けたらしい

「零・青・白・朱・玄・空・南・北・三・玉」が一字ずつ刻まれて  
いる10個の指輪を暁メンバーが一人一人つけている

トビの話からすると指輪をはめると暁の正式メンバーの証とされ  
ている模様

私みたいな小娘がなんでこんな所にいるかと言うと

ナルト同様私が人柱力だからだ

とわ言つても私は10尾というあまり知られてない化け物だが

でも一応珍しい人柱力なので暁に捕えられている

暁は人柱力を使ってなにかするつもりらしいが

私はなぜか生かされている

またぶん私の力を使って里でも滅ぼす気なんだろうね・・・

10尾については私もよく分からぬ

私も知りたいと思わないし

そいいえばナルトやサクラはどうしてるかな・・・

私は昔一応木の葉にいた

ちゃんとアカデミーも卒業して力カシ班の奴らと長い時間一緒にいた

7班の頃の私はずっとナルト達を警戒してたからまともに喋った事がない・・・・・

まあ今もその性格はあまり変わらないが・・・・・

久しぶりに行きたいな・・・木の葉・・・・

「ディダラ・・・・・木の葉の里に行きたい」

私の言葉に田を見開いてびっくりしているのがディダラ

岩隠れの抜け忍で青い眼に金髪の風貌が特徴の男？？（笑・・・・・

- 

左眼は髪でかくれているがスコープがついている

一人称は「オイラ」。語尾に「…うん」を付ける

両手の平にある口で喰つた粘土と自身のチャクラを混ぜて作った「起爆粘土」を用いる

これにより様々な造形品を作り・・・

粘土に混ぜるチャクラは1から4まで上げることができる

現在までに巨大鳥形粘土、蜘蛛型粘土、雀型粘土、百足型粘土、燕型粘土などなど・・・

他にも自分の口で起爆粘土を喰つて4カルラがある。

彼曰く「芸術は爆発だ」「クール＝アート」

彼にとっての芸術は「爆く散つてゆく一瞬の美」。

ここには・・・・本当の馬鹿だ(笑)

まあうちが知ってるのほのへりこだけど……

「そっかーでもな香澄……無理だうん」

だよね……仮にも曉に捕らえられてる身だしね……

もう言つて済つてたよ

でもさうちが言ひ事聞くと思ひへ?

今夜抜け出しあやお……

「ん? どうかしたか香澄つん……?」

いきなり話しあげられてびっくりしたが」「ほんは平常心を保たなければ

「いや……なんでもない」

そつ言つと、トイダラは「やうか? 僕は任務にいくからなうん」と  
言って部屋を出て行った……

「脱出開始」

曉にきずかれてはマズイからチャクラはあんまつかえないなあ・・・

・・・・・・・・・・・・・・

壁を拳で吹つ飛ばすか・・・

・・

音でばれるかな?

でもテイダラだつてしまつちゅうつ粘土で建物壊してるし大丈夫でしょ

ドンッ！――！――！ガララッラッラアツアアツアアツアア――！――！  
！――（瓦礫が崩れ落ちてる音）

「ヤバッこんなテカイ音でるんだ・・・・・・」

たぶん逃げなあや見つかるな…………いや確實に逃げなあや  
見つかる…………

荷物を手短に用意し急いで空いた穴から出た

「つてか木の葉つてばつち行ナばいこんだ?」

今更なんだけビ…………

まあこいつの時は…………

勘で行く…………

(爆)

「レッちかなあ…………」

まあこんなふうに適当に走り出ます……

「つてか顔変えなきや……また晩に捕まつたらめんどりだし

「変化…………」

変化つて言つても動物になるわけじゃありません・・・

私の髪は黒髪から赤い髪に変わり・・・・・ 黒い目は緑に変わった

「よし！準備OK！！」

また勘で道を進んでたのはいいんだけど・・・・・

今度こそ道に迷つた・・・・

「おんなじ所ぐるべる回つてゐる・・・・・」

绝望的

「おニ……お前つてばまにやつてんだ???.」

「ひやあ！！」

いきなり話し掛けんなよ！！！

びっくりすんじゃねえかよ！――！

つて・・・・・その声は・・・・・・・

ナルト・・・・・・・・?・・・・・

「え・・・いや・・・・あの・・・・木の葉に行きたいんで  
すけど道がわからなくて・・・・・・・・・」

平常心なんて保つていられなかつた・・・・・

懐かしいサスケを抜いた他のメンバーが勢ぞろいだつたから・・・・

「だつたらついて来いつてばよーーー！俺たち木の葉の忍者で任務帰りなんだ！」

皆大きくなつたなあ・・・・・・・・・・

サクラあれから髪伸ばしてないんだあ・・・・・・・・  
に・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

人の話なんか耳に入つてません（爆

「「」の子じうかしたの？」

サクラをずっと見てたらさすがにサクラにさずかれた…

「いや・・・・・なんでもないです・・・・・木の葉まで一緒にい  
かせていただきます・・・・・お願いします」

そつ言つたらナルトがうなずいてからこいつ言つた

「俺の名前は「ひづまきナルト」！お前の名前は？」

2回目のはじめ紹介・・・・・・・・・一回目は私は皆が嫌いだった

今もあんまりすきじゃないけど

「私の名前は・・・・・・・・・・・・

「初音ちゃんね、私は春野サクラーよひじく

「（）で本名書つちやつていいのかな・・・・・・？

いや・・・・・書つたら後々面倒だよな・・・・・・・・

それにしても変化の術つてこんなにばれないもんなんだなー・・

でも偽名なんてすぐ思いつかない

「私の名前は・・・・・・・・・・・・赤坂 初音・・

・・・・・・・・・・・・

何も考えずに書つたらこいつ名前になつた・・・・・・・・（笑

最初っから名前呼びかい・・・・・偽名だから呼ばれても反応できない  
かも・・・・・・

「よろしくサクラ…………でいい?」

「……」ボロをだしたら駄目……は通りがかりのか弱い女の子を演じなきやね……

「いいよ私も初音つてよぶね」

こんな自己紹介が続いて私が一番この中で恐れてる人の自己紹介が始まつた

「俺の名前は はたけカカシだ」

カカシは勘が鋭いからなあ…………気付かれてるかなあ…………

「よろしくお願ひします…………」

でもそろそろ木の葉に向かいませんかね?

「ほらナルト・サクラ行くぞ!――!」

いきなりのカカシの声に皆一斉に走り出した

「また走るのかよお・・・・・・・・・・・・」

まあこんなのは疲れたうちに入らないか・・・・・

「君さあ・・・・・何者?」

！！！背後にいつの間にかカカシが！！！

「えっと・・・なにが言いたいんですか?」

ヤバイ・・・・・ばれるかも・・・・

楽しみたかったのになあ

「お前せどりの黒田助だと聞いてるんだよ。・・・初音ちゃん」

カカシ……………笑つてゐけど殺氣があふれ出でる  
よ・・・

「私の出身は木の葉ですよ。カカシ先生」

ばれてるだろ？が念のためか弱い女の子を演じづけよ？・・・

「木の葉かあ～じゃあなんで初音ちゃんは額当てがないんだい？」

ヤバッ・・・・うちの額当て横に傷入ってるからつけるわけにいかなかつたんだつけ・・・・・・・・・・・・・・

なんで私の額当てに横線が入っているかと言つと

暁が私を無理やり捕らえたのではなく

私が自分の意志で暁に捕らわれに行つたんだ

だから私の額当てには里の裏切り者として横線が入つてゐる

「それは・・・・・・・・・・・・」

もう無理だね・・・暁に引きかえそつ・・・

「ちよつと初音ちゃん・・・・ビーム行くの?」

カカシ先生・・・・・・・・

その手を離していください・・・・・・(涙

「ちよつと懲戒を思い出して・・・・」

・・・・手がちよつと緩んだ!――!のすせ!――!

「――――――」

ヤベツー!の技は!――

と思つた時には遅く・・・自分はあの技の発動していた・・・

「生死樂靈!――!」

この技は暗部レベルの技で

取得する事は極めて困難

この技にちょっとでも触れる奴が居たら体に風穴が開く

といつても今回は全然力を込めてないから内臓破裂ですむかな

まあ当然力カシは避けたがその後が問題だ・・・

この技は禁術のため下忍が使えるはずがない・・・

もう隠し通せないな・・・

「あの・・・?」

まあ・・・一応生きてるか確認・・・

ナルト達の姿はもう見えない距離にきている

「お前何者だ・・・・・？」

やつぱばれた――――――――

まあしょうがないか・・・・・・

懐かしい顔見れたし楽しかったよ・・・・・・・・・・・・・・

先生・・・・・・・・・・

「しょうがないなあ・・・・・・・・私の名前は夜光香澄・・・・ねえ

思い出した? ?」

本名を口にしたらカカシはスゴイ驚いた顔をした・・・・・・

「香澄か・・・・・・・・変化の術だな・・・・・・お前いままで  
どこにいた? ?」

そこ聞くかあ・・・・・・・・・・・・

「先生には教えてあげるよ・・・・・・・・・・・・知つてる? サスケは大  
蛇丸の所に行つたんだ・・・・・・・・でね私は・・・・・・曉に行  
つたんだよ・・・・・・」

暁という単語にカカシは殺氣を出した

「…………香澄…………お前木の葉を裏切るのか…………  
…………？」

カカシは深刻な顔で私を見てくる

「裏切ったのはどつちよ…………私が人柱力だからってなんで皆私  
と距離をおくの?????私は何もしてないのに……石を投げ  
るのはなぜ??悪口を言つのはなぜ??なんで皆私を恐れるの……  
?小さい私は疑問でいっぱいだった…………でもね…………そんな時ナルトがいた…………同じ苦しみを知るもの…………そう思つて私はナルトに心を開いた…………なのに…………なのに…………」

カカシは表情を曇らせて話を聞いていた

「…………」

ずっとカカシは黙つていた

だから私は話を続けた

「ナルトは私と違っていた・・・夢があつて明るくて皆を見返す  
んだってね・・・だからナルトには友達がどんどん出来た・・・  
また私は一人・・・同じ人柱力なのに・・・だからあの晩私は暴  
走した・・・その事件がきっかけで火影は私を恐れ暗殺を計画し始  
めた・・・だから私は暗殺される前に里を裏切り暁に身を置いた。  
・・・だから裏切ったのはそつちが先でしょ・・・？違う？力カ  
シ先生・・・」

そう言い残して私はその場を後にした

カカシが追いかけて来る様子はナイ・・・

「よかつた・・・先生と殺し合いはしたくないんでね」

それにしても勘がよすぎだよ・・・

木の葉の一楽ラーメン食べたかったのに・・・

でもそんな事言つてらんないかあ・・・

「暁に戻んなきゃ・・・」

はあ  
・  
・  
・  
・  
怒られるな  
・  
・  
・

「おい香澄！！！！何処行つてたうん！！！！」

セイ・シム・ヒ・ヤ

凄い血相で怒鳴つてくるティダラ

睡とんでもるって・・・汚いなあ・・・

「・・・・木の葉に行こうと思つただけ・・・」

「君は素直に言わないと怒られるから・・・」

「木の葉か?うん・・・・・今度任務で行くから一緒に行くか?」  
ん  
・  
・  
・  
・

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

「 テイダラがそんな事言いとは思わなかつた。 。 。 。

「 うん・・・・・いく」

早く行きたいな

まつてよ木の葉・・・・・

私を敵に回すと恐りしこつて事を思い知らせてあげる・・・・・

暁を抜け出す？？！（後書き）

ありがとうございました

木の葉に到着ー（前書き）

お読みください

木の葉に到着！

「デイダラが木の葉に連れて行ってくれると誓つて

もう早一週間がたとづとしている

「ねえ・・・・・デイダラーまだ木の葉行かないの・・・・・」

「んー今度一尾の奴で砂の里に行くからその途中で降りしてやるわ  
か?・うん」

砂の里か・・・・・

一尾つて我愛羅だっけ・・・・・・

たしか一回中忍試験で会つたっけな・・・・・

「じゃあ途中で降ろしてくれる・・・・?帰りは自分で帰るから・・  
・でもあまりにも帰りが遅かつたら迎えに来て」

今回もカカシにばれるかもしないし

今度はどんな格好で行くか・・・・?

この際変化しないで行くか・・・・?

それも面白いかもね

「んで? その任務はいつ?」

なるべく早く行きたいな

「えーっと明日だけなつん・・・

ふつ・・・・・・・・い・・・・・・・・

「じゃあ明日ヨロシク・・・・・おやすみ

そういう残して私はティダラの部屋を出た

「そ、う、い、え、ば、四、代、田、が、こ、の、前、死、ん、だ、ん、だ、つけ、・・・・・? 五、代、田、は、三、

忍の一人だったつけ?「

どんな奴か楽しみだな・・・・・・

「ああ・・・もう寝るか」

明日は楽しめてもううへ・・・・・・

◀次の日▶

寝すぎたな

「ネムイ・・・・・」

「デイダラはまだ居るだろ？」「…………？」

「デイダラ……」

そう言つて廊下を歩いているとあちから「デイダラが走ってきた

良かったまだいたんだ

「香澄もう行くぞうん……」

荷物を持ち、デイダラの粘土の鳥に乗った

数時間空を飛んでやつと木の葉が見えてきた

「デイダラ木の葉ついたからおひしトー」

下にはあんとかかれた大きい門

やつとついた……木の葉

「香澄変化しなこのかうん?」

「うん・・・」のままの姿で顔面にて行ってくれぬ・・・やばかつたらすぐ帰るかい

ディダリと口約束を交わし

私はあんと書かれた門をくぐった

額当ては新しくサソリに作つてもひつた

サソリはもうこの得意だからね

もちろん額当ては木の葉

久しぶりだな」の風景

れあじーじーじーつかな

「おまはー楽だね」

白のれんに赤い文字で一樂

懐かしい

「おじさん塩ラーメンひとつ」

私がこの里をでて3年

私の顔をみて夜光香澄と分かる人はおそらくあまり居ないだろ？

「へいおまちーー！」

暖かい塩ラーメンをすすりながら次の行き場所を考えていると

「親父ーー!!ソラーメンひとつーー！」

・・・・・・・・・・来ると思つたよ・・・・・・ナルト

あまい田舎を合わせないよつに食べた

ばれなこいつひさしだと由よつ

「あれ？ む前見かけない顔だつてば？」

「あ・・・めでべへへ・・・・・

「うさんちわ、 うの前長期任務から帰つてきたばかりなの」

れで・・・お前じりがつかな

「へえー俺はいつもまきナルトだつてばよーーお前は？？」

また自己紹介か

「私は香澄です」

あえて苗字は言わなかつた

名前だけなら誰も氣づかないだろ？

「それじゃあ四代です。」  
「お前ついぱもっ行くのか？」

「ワーメンも食べ終わつたし次は四代田の墓でも行ひつかな

「ええ・・・それじゃあ」

足早に墓に向かう

四代田の墓は木の葉マークが刻まれていた

「おい・・・四代田・・・私はビックリしたらいいんだ・・・  
・・・先に死にやがつて・・・・・・・・・・・・

返事なんて返つてくるはずがないのに

「私・・・疲れてんのかな・・・・・・・・

先ほど花屋でかった花を墓に置く

「木の葉は私を裏切った・・・・・・今度は私が裏切ってやるよ・・・そこから見てな四代目」

わい・・・・皆で会議に行くべつか

「ちよつとサイ…ナルトを怒らせないでよ…。」

遠くからサクラの声がする

「ナルトくんにただ本当のことを言つただけですよ」

「...アーリー...アーリー...アーリー...アーリー...」

「ちよつとカルト!!!

喧嘩か  
・  
・  
・  
・  
・

あのサイとか言う奴がサスケの代わり

「ふーん・・・・」

サスケとか私が居なくとも全然問題ないじゃん・・・・

「やっぱ私は一人か・・・・」

・・・・・・・・・・

「あーー・香澄ーーー」

遠くからナルトに呼ばれた

「ナルトさん」

はたかも今気づいたかのようて反應する

「そちらのお二人はお友達ですか?」

サクラとサイを見て私は言った

「あーひがサクハナで」ちがサイ

一人がヨロシクと言つてきたので

「香澄ですか？」もヨロシク

つと言つておいた

サクラは香澄といつ名前に少しだけ反応を見せた

「喧嘩ですか？？」

「あーあれはサイがふざけた事言つからだつてばよ……」

あー始まつた

「だつてそりゃないですか、ナルトくんはなんでそこまでして2人を連れ戻したいんですか？」

サイの発言によくわからない事がひとつあった

二人つて誰の事??

「あの・・・二人つて言つのは??」

すると隣にいたサクラが

「元々私とナルトは7班に居たの、7班には私達と他にサスケ君それに・・・香澄が居たわ・・・でもその二人はある晩姿を消した・・・サスケ君が大蛇丸のところへ行つたのはすぐ分かつたんだけど香澄の行方がわからなかつたの・・・でもこの前私達の先生である力カシ先生が香澄と接触した・・・香澄は暁に入つたって・・・だから私達はサスケ君と香澄を連れ戻す事を決意したの・・・まあそれが原因で喧嘩してるんだけどね」

馬鹿な人たちだ・・・私は木の葉に帰る気などないのに

「僕には理解できません」

サイはそう言い残して行つてしまつた

その後をサクラが追つた

「ねえ・・・なんでナルト君は一人を連れ戻したいの？」

「ねえ・・・なんでナルト君は一人を連れ戻したいの？」  
「やつこいつとナルトは拳を強く握り答えた

「初めて出来たつながりだから」

つながり・・・・・

「ふーん・・・・・そつか・・・・・・」

馬鹿だね・・・・・めんどくさい

もういいで出体ぱりしちゃう・こつかばれるんだし

私を連れ戻そなんて無駄

「やつぱぱ香澄はわかつてくれるよな！？？」

「『ぱつかじやないの・・・・・?』

「くつ・・・・・?」

「二人を連れ戻す？無理に決まつてんじやん・・・・・・・・・・・・  
夢見すぎなんだよ馬鹿」

ナルトの顔がどんどん怒りへと変わつていく

「お前になにがわかるつて言つただつてばよーーー」

わかるよ・・・・・・・・・・本人だもん

「気づかないのか馬鹿ナルト・・・・・私は夜光香澄だ・・・・・  
・・お前らが連れ戻すとかなんとか行つてる奴だよ」

あはは驚いてる

本当にナルトは面白いね

「暁はいいよ…………私を化け物扱いしないし…………  
私を裏切った木の葉と違つてね…………」

ナルトの顔が険しくなった

「裏切つたつてどう意味だつてばよ…………?」

もういつか…………言ひちやつてもいいよね…………

「私が暴れまわつたあの日をきっかけに火影は私を暗殺すると  
計画をたてたのよ…………生まれ育つた故郷に裏切られるなん  
てね…………」

わざわざと帰りなきや……………………もう長居は許されない

「眞に伝えて…………私は絶対に木の葉には戻らないつ  
てね」

ナルトは必死に私の腕をつかんで叫んだ

「なんでだよ…………なんでだ…………なんで暁なんかに…………

・「

あんたのそ、う、い、う所が嫌いだよナルト・・・・・・・・・・・

いつもまつすぐで正義なあんたは私には脇しすきれる

「じやあね馬鹿ナルト・・・・・また会えるの楽しみにしてるよ」

また会ひ田まで生きててよナルト

あんたは私が殺してあげる・・・・・・・

木の葉に到着！（後書き）

ありがとうございました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3101e/>

---

疾風伝

2010年10月11日08時17分発行